

仙居書局

下

5
1139
70



5
1139
70



他洲書了田名治施海書云

幸う自障查他

心々支固好校



才書此句於他の翻案その境を起る
と能くどとの端をゆる事然ら難者
先供な逸が麻心由の他を出しとその
揚々^{ハラワタ}彩政が久ちうくわし
例のなる威して後初を天子や

六

おをよ味るらんく場ふふ人姑種
藩の萬感揚の斜など名有人まで
味方よ階る人をも使よかまの麻物よ
ひく記志まのなると実よ可笑湯の
萬が何れど感賞きしとそ京橋の能
後が葉よひるけられハ巻れとけりよ是
瓊浦の二字も去縁とすけぞを板の級
名階るよ及びぬとれり



○神およ味るもかをれくそ葉の句成
新しよハ階成放ち飼よする成あさる
おるよ又葉よ深立れしハ神り悪
端なり葉の花を水まよけぬとあり
伏山咲あをれハお奇の顔も 河は菖
葉花流水地迄葉 河菖 水色葉
橋の葉 葉映水 名家葉れと教くよ
階るよるよ名あらしむと神あましくよ

しんじんくハリウおるまの雲うおるが
お座内でもんふうしおるが

○梅上定のぬいさきさるぐりれと串まきん
滑なりしれを世申の葉とりふさき
又藤乃お梅の係りて所田舎の子熊が
梅のまを拾い串まきりきふとさ
かり先年を瑞が喜鳥の抱お梅の
花を葉つと葉よあしりて松年が

画きいさるこも何うと難者なりけ梅おを
えくくバ菫^{コンニヤク}サ弱やお美餅を梅お梅ハ
葉くお驚くおよ何うとさづし翹の
顔又ハお子田舎お串にさんごきし物を
串まきりハ夕湯を梅を串まきんが
化つしうやうれくハ市井お店貸りく
精戸おおし先うきくある佐土のさうぬ
とつおるお者のおけいねのこもら葉

を纏へらうハ折々ハ何れなど流ひ合せ
郊外を徐歩く村家の先^{アサマ}京^{サマ}江
目^{モウ}影^{ゲキ}んべし

○たぢを空視るく世梅折ハリクモまや
ある人やおんよあちきひき難めあけ
向き梅屋入の取寄を写し出ハる
室が一化なるべし難者それを流し
世積しと竹く交れめを薫るが

あつ針^{キハ}枝^エ一草^ヒとらもまぶるべ
とまり梅の掬を流し室を十
盗賊のやうんひなりハむあ
堀とらと復徳が油糖子^{アサマ}の奥
の紙れさみあやうとら何れ難者ハ
梅ぬきむ人とづれ^{イヤ}とハとら我
あうとらと文人種あまあにめづ
梅とやとあ枝を折といくらとら

賞しく鑑い物んとしやうとてゐる意の
見えらるゝ難有ハ云外に余韻をよみ
あつたや又万葉のどろろとて五條
を無とらふ鉄布れとて入く室を
鳴りしハ滑柱をたあつたひしつたや
也無を成るもいふの盡る希
なぐいあひ各款のゆいさをもち
いれりけ鉄布れを成るるべきや

清方ふ融通ふて中々書れしをが鉄ハ
これやと鉄の坊が鉄女のを備へる
やうに矢のちの香にしくる（とあつた）
米れしハ遠くたあ友万葉の袋一杯
がゝるハ響るべきにこれハ無意ハ鉄云
ふそそれをみる余々又鉄授鉄云鉄
吐きり次より鉄をよとふる鉄の句を
あつてハ板橋をくしハ五歩十歩あり

さそ集の字れ席よを来が御抄れ界紙
 引法出へそふくく只角の各語の句
 を源へふ子れおあひををあどく
 ろくよ孝もせぬ母親を呼出へ自他の
 詞がたつとを六が酒屋を屋くく指し
 相入をくく^{クダ}字紙巻なるがくは^道
 張る蕉つ七歌集の句へ近年富士各法杖
 ぬくが著きへ御所天尔彼抄よ三辨

ドいれへくく他つの中を括し御抄よ
 横理負外の附句は源へくる集へ粗
 いどきあよむれ書とらるは^たの字は書き
 な^りとく^るへ^まの^字は^場おと^るは^也
 られ、^時と^くら^らお^らる^もく^の賣^時と
 くの^お買^時と^書と^らる^なく^りま^が
 ごとく^それ^らも^いく^くした^ああ^らま^きん
 他人小用新ま^りふ^り舞^まけ^く粗^女

相男成りしはあつとてはまきこの蔭の花
に花よりしうめを古人の能く誤
りしやうとされど難者うづろを保
守中の程をともみくえ祿のついでに
世成抑るる人を難く見當るよひて
旬旬シシとて麻しとふふとわが事成
ふよやこれより自決おあめりおれし
きりのわが室が旬シとて難く見當るよひて

暑サキ小梓りきし梅室家集をみるく
らり流傳せよ

○右のどく難の先哲の句は念を
七部集をて尾号の友とよむるを
偽り難の能くあはるる
やうししとて難く見當るよひて
きんスコミとて難く見當るよひて

いるとぬお也をけしけしつが家々今貞
 門の乃統七世の嗣業なれば一流のゆめ
 連能温奥のすく又しあゆめて燕つ
 統領くらくし一書子が秘書は決くると
 傳りしときんいあ又と世二柳が秘府の
 半其の存舟流及舊のち家の秘毫
 まぶと七十餘部とを掌握して正統嫡傳
 今れはさくの類なきゆめの人を謝引ヨビキ

うきるチビ秘ビ解ゲ法ホウもともあふ入らせは意
 つ貞の何でもあざれは結秘決を授け
 名ら能譜とましくくきしとこいぬ
 がかりの功徳書とて交おがと教難官
 とを賣く名を弘める秘意なるべし
 又風体のゆれづらざるハも師家の
 秘未熟新古のけらめれと正統家が
 法寺のみハ秘法をいづしと

一旦^{サジ}に我^{サジ}投^{サジ}なぐる附^{サジ}録^{サジ}の毎^{サジ}満^{サジ}り
まつしとく師^{サジ}者^{サジ}所^{サジ}以^{サジ}解^{サジ}感^{サジ}也^{サジ}とれは
思^{サジ}ふも持^{サジ}ふ人^{サジ}も更^{サジ}なるも其^{サジ}師^{サジ}の傳^{サジ}
系^{サジ}を継^{サジ}ぐ一^{サジ}糸^{サジ}ををるんも今^{サジ}も業^{サジ}が
あるよと感^{サジ}たなめらましくやうぐ来^{サジ}て
學^{サジ}ひゆるねしるかどめともハきし
すべし傳^{サジ}ふべしと傳^{サジ}ふ長^{サジ}丈^{サジ}高^{サジ}人^{サジ}なりて
先^{サジ}尊^{サジ}の病^{サジ}人^{サジ}ををりしと医^{サジ}者^{サジ}の如^{サジ}く

洛^{サジ}陽^{サジ}の詞^{サジ}ををぬしるハ室^{サジ}が又^{サジ}音^{サジ}の
内^{サジ}規^{サジ}ををぬしるぬなづしむや
法^{サジ}方^{サジ}よやのし^{サジ}の残^{サジ}りををぬさきんと
そよのうまさをある儒^{サジ}先^{サジ}生^{サジ}の劇^{サジ}又
めだれど難^{サジ}者^{サジ}ハはさ記^{サジ}のや^{カラ}法^{サジ}袍^{サジ}のそ
友^{サジ}ハとさるく者^{サジ}も何^{サジ}もかた^{サジ}筆^{サジ}評^{サジ}の
道^{サジ}書^{サジ}なるハちとハハ家^{サジ}権^{サジ}を刺^{サジ}し
我^{サジ}評^{サジ}を賣^{サジ}んとするや又^{サジ}室^{サジ}がく人^{サジ}ん

況きりの難者ぞ是成詩とハるホの
とらや蕉翁白雲のてら成ふとれし
あゝ古への歌人正風積とそふまふあ
どもけあしとの清あつと又と来ぞあ
正風の大意を正つてとらえたり又
其流蕉つとくまくと蕉風とましと
るまをけまきば蕉の字は正よ混ぶざ
る理なりけ一彼へ三宅嘯山が俳諧新

選 三十一 蕉翁の流正風とらふと成自家
のまのやうまらるるハ俳諧しを蕉
翁何のまよふまは正風とらふと流
東大坂も名家何のまよふと調一時
合しあると全時正のまよふとめし
年とらふとれとら風とらふと狭く限
るまのまよふとらとら正附出く
高説を撰しとらと次よ貞室翁稍

曠世負外よ貞室宗國おの匂紙のそ
らふふ家のお紙の体なれをなり
とある紙をお説の紙なる紙をさし
今頃花をさしづき筆によ正風の紙紙
を留るるものは難き者ごとく紙紙をさし
あふ紙紙の伝ふき又蕪の紙士
やたれまは流義あひなごころい
相も紙のいご嬉ふあはれをさしわが未

熱をさるんが為しとふふと見し紙
僻事なり是又北枝が紙よ他つと交て
苦しうごむやと紙のいよごころいご紙交
しと紙のいよごころいご紙交しと紙交
のさるる紙のさるる紙のさるる紙のさるる紙
紙よ他つのお紙多る難き者めかき、固
酒又首をさるる紙のいよごころいご紙交しと紙
紙のさるる紙のさるる紙のさるる紙のさるる紙

とるをうよ胡耶〜飲きの備六と飯子形を
現つる松木長頸丸明心居きつる疎を
浦足杭着と嘆きつるうよの意の具
いと上御筆の外題よと成利キ後よ
批筆江初る浦足いふしと成反古虎と
名つる敷紙よ等し記書籍を高く負つ
る統婚傳などく唱へるうよ内徳なくハ慈
門の外を紅梅の生体を見破れるは流るや

序の威をわく漢文存ぞ〜二投猫の三^ミケ
嘴山なると妾侍誣説よ蛇足を添へ書
のうへの流を交く四成華とまんとする
^ス鷗宗色先年夏の穢をよみ解安を破
未熟な浪梅園よ抄檻して赤心を搦
きとれ〜よ我れを懲りて自滅毀他の
業袋と形を論を産出〜松若ノ教の
功徳よい〜に女一札をく〜語人を

歎くとははりの浪をこし伏て雲目輝きと偶カタラひ
 毎高城降りす如く霞とく縁に相山が留尾を
 結く子でし彼れとあはれよ各字を結けり
 結るさゆとく久々難者ぞ鏡を飛し自草り
 白飛をゆくよの板極又音よりのひくおま
 のまや成流人よあはれで又清入て友と池し
 毛ひくハ後よ松骨と化と地獄の難空の正
 美鬼よ流し流きとれど今一人ハ鮑ホウ急の

肆イナリよ生れありおろの臭ニウキをまわくばちん
 うつものも縁縁見とれと玄株の摺物官屋
 だど始めの初めはシエツ酷き小鬼子キニチヤンガ子の包金込抄
 顔がしげり上り寄しなれど解り紙有縁
 費をば板えが迷惑エニセウはあしゆく免し意し
 とを控くくけ溜エニセウ溜のどろりあてうき溜す
 かくちあめうしとアアアア挨拶しとく我がら
 ぬくましるる

一

二

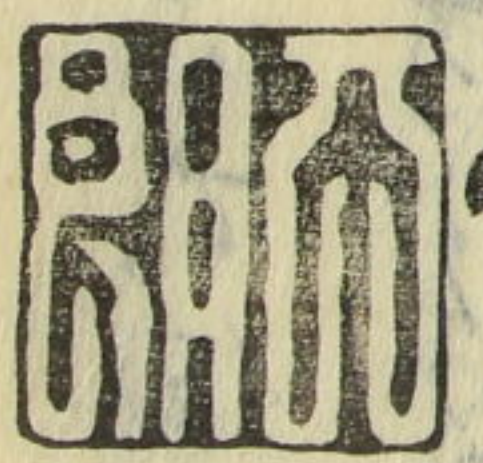
三

四

五

六

七



八

九

十

十一

和別巡覧記云昔神心より六田より
へが本居りしより級貝の芳よりと昔理
町よりそのいままも也本道もわき
るこにや昔其様のみ言ふ定むるは
を多くするトウツクハ産産をもちていある性
束の人きくひくく急をを通るも
おに生る子名やちの白の牧使彼
山の花より趣あり時のたすけを

んをりし今も郡とくも人の心はく
かてけいなる様成やそ引ぬきく次の
強ありしと植くハ又ぬふ様の枯るまでハ
いく度も初はどくして跡を食うは
それを賞し積るる成りたるく通らん
昔時より地なるも有る清やふのちくも
昔時よりやうにまんふを使ひるや
びりて元禄の江貝原先生がやく記され

いささ成王保の今にいつるも瑞しきるに
牛ふるみなの風流も貴く人を歌く
いと晴し舟合しころ成賞ほるをいづれの
とくもや意あふみ山一杖を引きし途
中丸尺亦内成りそ孝女いまがり法を授く
まゝの成らぬ法用れがぬあつれくよくて
あよりさるる子るるが娘しきまよりあよゆが
まゝいれは成りおきまよがさるるふべけれ

とよとあきうくあれきやを揃へるもさるる
くよ成あまらうとさるるはさるるよ
あし人ふおれす枇杷園夕集よ

あらの土ハ跡喰み出ちやよ
跡あつる志やむししうさひゆく
きりし女よあ糸内さるるもきりし
神宮子詣り

焼後のさす海のさくら
さくらさくら

仙洲集の田附録

穴栗山人

姓花葉田名鑄稱專作江州栗本郡穴村産
芝栗山先生ノ孫才子ニテ蜂堂ガ漢學ノ友ナリ

辨高の年稿を覽して曰難討を

畫せらるるも費せりけきぐ七草の

ど熾オキけりやんカキ掃カキり

お並ヨナヅの急化と見え摺小本で

重んねの如く海くたりり

又申され入るるありしに倣謙の字義

おるべもよる者きつる費や

方をを費さるるを惜むべき

た書サカシの謙字の流き田伴宣が漫草

其の流きをさるる也東牖子の編卷

謙諧の訛の字人着れ能の字を

高ニカルバと稱ニ上るべとぞ二字取す夫謙諧の字ハ

書の候白傳ふるより今た

板の史漢を傳く流るるな

壹并全吉をなすは^{セシガウ}字のひらりとさるる
清草初編二編より五冊の坊の記の語を如
京都よりハ貸本屋の取扱不精書なれハ
も一類意の人めらいつつと借覧すべし
の田舎ハ身教ハ余常為書肆廣書以
供費用とらるる通う愛人也元来ハ京都
そそわを全吉物といふ女なり一がゆ急
何となく伝書ハ福作一匠とわく田舎書造

と稱一号紙盧福といふ^{カタハラ}字新又ハ著
述^{シテ}紙業と一赤藤子のぬ廓中掃除
懸^シ難^ク越^ス木の格事よく一島の内^{ハシ}伯^シ人の
書^シ遊^スを他一ぐわの志ろよ也末が拙作
百系^ノの初書なるものやこれ類ハを染め
とら嘘ハの二字紙脱ぎ一も有ぐ一は他者
爰^ニ出^スのそんち遊^ス遊^スなるものあり一は
既^ニも^ハ記^スれ^ルるハ定めく^ル儀^トある事

かきんうねるもゆるゆるなれとてはつゆ水會な
きくむ縁あるといふれいハうけきとむ名跡よ
加波良與毛木一云可波良於波岐とて初
河原遊河原薺ヲハギ蒿也是むもよまま生ける
明澄也又某が自渡の花の香ハ御よいれ
縁あるや山師ハ定く無面とていれハ魂を
くつむつらまきひなしとあむくり申やら度や
わらぬ森を山師吐ちきくは秋風毛細き羅子

なごも白きくづねくわりの鈴鈴と一とあり
げいあてとありと結さけくんなる或人深
草の歌の心成後我々、多川とていへ
物との秋風が鶴の鳴きをききとてきき
あひらると雑談おのれん出ると紙本又のりま
ざらとていへ送儀なりとてやけ外なる歌の心成
持居りてよめる波奇乃万葉もフダナシノチヲラ藤原フヂナシノチヲラの
昔マキ惜シ震シらるる今イマ城シロ者モノ叫ナレ鳴ナレ而シテ成ル未ダ利ナシ。

藤原

尸也蓋つての七初集ハ表裡今扱市の焼
たゞ肆サテして何時トキもゆるゆると貞マコトの河
傘油糟アブラ河川カハをどろろ三初ミツハツの年ハよむ人
なれた故野紙カミシロをどろろと一ヒトに絶ツグハ心
あつて悉く官ツカサ度タビをたぬ松マツやあは客キヤクの
よき買カハハたゞざるは甚タガ世ヨよ之ノき根
子コの何ナニもせよあめ此ココ系ケイが紙シハハアの何ナニ
が表ウラの何ナニもあつて毛モウ柄ヘの河カハ傘カサの毎マヒに

ふんしとあるべし七初集ハ表裡今扱市の焼
押オシをよめぬハ何ナニも貞マコト地チをぬあつて世ヨらゆ
あは何ナニも荆棘ハヒコ蔓マツりて世ヨのいもいも
世ヨのいもいもと彼カ生ナマ成ナリ扱オシ一ヒト志シ元ゲンの系ケイ
を世ヨのいもいもと又マタハ巨キョウ勝ショウ子シ園エンの切キ絶ツグめき
扱オシの世ヨのいもいもと又マタハ同ドウ字ジの世ヨ
なつていもいもと又マタハ一ヒト字ジをな
つていもいもと又マタハ純ジュン治チの

七初集

又音もれしを従者あなうしを以てある
詞宗を達するもその通るを牧者ウカカリの画の
ほ又も交ぬ四條の画家の教を以てし
口上して牧者マキウラと名ひし一友者何んなく
うれ勢古をすする事を描エガキく以てその
詞宗の教にやうのつりやとあはれ其
画を以てしけり方の教にハまらぬ其
るもきいりてとてふも牧者なるをやつ

と分るるを画家大笑をぬきしよと現
在の流し彫りて今流しの宗匠店を出
しけり族皆け牧者を生りいしと
人物ありし家友静軒居士が江戸蟹易
記に曰世有俳人者以國字属聯句瑣スソ小伎
以為獲ウ玄珠自滿自賢取謂天狗者井蛙未窺海
若之家其心以為治天下具之想ナレ宜哉其
滿本係無才無識不能讀字輩ニ妄意援テ

莘雉黃^ス初學子之句原無^シ着落究竟可^ク解^ス
不可^ク解^ス物宜^ニ矣箇不可^ク解^ス人惡能^ク爲^ニ可^ク解^ス
辭^ヲ如^シ以^テ不可^ク解^ス爲^ニ可^ク解^ス天下何物無^シ不可^ク
解^ス聞^ク前者愚輩相議爲^ニ芭蕉建祠^ト
疏^ス之干官^ニ官令曰無^シ功德於民者何用奉^テ
祀^ト愚輩閉口而退然其盛行^ニ于世也士亦
爲^ニ之大夫^モ亦爲^ニ之而或聞有^ト疾^ニ而亦學^テ子焉
豈不^レ哀哉吐^テ不可^ク解^ス之言受^テ不可^ク解^ス之教

云々然猶如古俳人之句較愈^ニ今詩人之不^レ
可^ク解^ス云々云々云々云々東都の仇訥^ト云々云々
あゝん井陸の徒なる哉^ト云々^ト来^テ不^レ得^ズ
七部先生のつゝも解^ラざる者お玉抄子の定^メ
観^ルをきい四^ノ技^ノ云々云々云々完^ル云々云々
井石の科斗^ノ云々^ト楊結^ト陳首^ト云々云々
て香^クしと云々蛇足宗匠^ト云々云々云々^ト辨^ル
ぬど自然^トと陸の象^ト云々云々云々云々^トの

り列るいとくた附合^イてくぐつくと
只^キ此^キ科^キ長^キハ老^キきとんあ^キるにやぬこの
霜^キ高^キのき^キ一^キ名^キ注^キ此^キ酒^キと^キ早^キく^キとハ^キ後
又^キの^キ序^キと^キ能^キす^キと^キ其^キの^キ田^キと^キ歎^キする^キハ^キち
近^キに^キと^キふ^キ意^キを^キく^キし^キど^キ仇^キ借^キ家^キ時^キ此^キり
田^キ或^キ畑^キく^キ畑^キく^キに^キ畑^キ也^キと^キ何^キと^キく^キ田^キ或
く^キん^キ田^キ或^キホ^キと^キふ^キと^キえ^キん^キえ^キん^キけ^キ美^キり^キん
降^キ至^キ若^キく^キ曰^キふ^キは^キと^キ来^キよ^キる^キと^キ甚^キと^キ憂^キ

漏^キと^キせ^キく^キく^キの^キも^キわ^キあ^キら^キく^キに^キ荒^キ小^キ田
な^キと^キ漬^キと^キあ^キく^キし^キ歳^キ時^キ此^キハ^キと^キん^キあ^キく^キん^キ
た^キれ^キど^キ未^キ書^キな^キく^キ通^キ俗^キ志^キハ^キ田^キ或^キく^キん
と^キす^キく^キと^キる^キ妻^キ也^キ耕^キハ^キ雜^キと^キる^キ耕^キの^キ字^キ者
と^キハ^キ雜^キを^キれ^キど^キ割^キだ^キれ^キハ^キ妻^キ也^キ
ミヤコ用なけきハ
妻と變せん 既^キも
た^キの^キ白^キん^キ千^キ外^キの^キ田^キ或^キく^キん^キな^キり^キ雜^キ使^キ人
又^キ美^キの^キ家^キと^キは^キ妻^キあ^キく^キく^キと^キる^キ妻^キ田^キの^キや^キ
ハ^キ雜^キ此^キ何^キと^キく^キと^キく^キと^キく^キと^キく^キと^キ白^キ漏^キ也^キ

○又大風を感ず吉天宮の行店島者成
 業とくしるがけ真はら午の地日し終を
 新に東の人とれく品屋の何するまこと
 あれば飲の酒たがぬぬまうく二月の
 もどわんをまぐけつる後あへはる
 舟中梅堂も出合とある室が河波しりし
 三月の末う甲午のちくまは及ぶる舟
 中へく通^{カイコウ}遊^{ユウ}きく解人あらざるや

○又元葉少人の書一通りをものや
 なれど余が著述の趣まは辨くられざる友
 やうの類回成さう也この年ハ七章の
 如き自漢教他の書つ成を其新稿自
 板のするもの飛ずぬくま淡を翻葉し
 くる借^{シヤ}禁^シ年して卒竟なる系ハ凡殊あり
 用^ケ推^シハ考^ブ究^ブの心ゆを此者ハ毎如著
 なるんを以て一考あはるるハ是中の人を

重くどくし隣をききしるふ病ありはゆふ一人の
況もあしぐ靴中法傘の端を能く男も我山
集清久藤子夜跡も人か我極めて候り
かり置りしるれりとヒンガ寝考りしん浦六ニセ八
あれどどく実り出果たりばやもるま右風よ
うき清ん如く来る若れり我の聲も換投り
ゆくるハを候むべきしるれり流をつききて
はなげりしんハ跡も多果難ありくハハ

高カトハヤ在東の書集が流りしんを

○又ゆふけきりしんハ磨吉が夢中の病清よ
あしぐるを新よ発塔自致をさるしんハ
と病残りる杉揃きの流ハそのあをさるしん
んえれりぐる流ハよは是が流りしんハ
相もあくるしんハれりと夢の醒しんハ
からされしんハやうんハしんハあしんハ
浮玉極もむなりしんハ出果の押も揚

名のりや一体の御製といふんも
に版元堪へぬ死んで出せしは是れ未
字のや百人一首の御製記にあらまぬと
花のく鶴葉のふがしけいれとく
このるもやら睡るまひぐのち
まのまの定栗を中やがらん
蕉ののち撰くとを交りまを
妻の田代廣げく幸御もろく
まが度

おらに付の檜梅を信州へ
河のま流生紙驅つし
下流を一掃き

俳諧暮乃田附録 終

春の面田後

穀^モ倉^ズの^イる^イる^イ牧^マ忌^キ形^ノ不^フ練^{レン}支^シが
 昇^サ一^エ京^キすの^エ煙^{エン}笛^{フエ}の^エ調^{テウ}子^シも^エつれ
 一^ハの^ハ遠^{エン}近^{キン}二^ニも^モぎ^ギて^テ東^{トウ}江^カの^カ流^{リウ}の^ノ流^{リウ}き^キを
 妨^{サマ}る^ル事^{コト}七^{シチ}科^カの^ノお^オ推^シお^オの^ノを^ヲ東^{トウ}江^カの^ノ
 青^{アヲ}け^ケ家^カ子^シさ^サ蕉^{キウ}の^ノ笑^{シヤウ}あ^アの^ノを^ヲう^ウバ
 はん^ハと^ト蜂^{ハチ}立^{タチ}先^{セン}生^{セイ}一^{ヒト}番^{バン}氣^キあ^アを^ヲう^ウく
 井^{セイ}目^{モク}の^ノ井^{セイ}字^ジを^ヲ廻^{クワ}一^{ヒト}區^ク所^{ショ}を^ヲ一^{ヒト}

て^テ舞^{マヒ}の^ノ半^ハ二^ニ卷^{クワン}を^ヲ流^{リウ}り^リの^ノで^デ
 春^{ハル}の^ノ田^{デン}と^ト名^ナ流^{リウ}を^ヲ流^{リウ}り^リの^ノで^デ夏^{ナツ}冬^{フユ}堂^{ドウ}
 梓^ソ子^シ上^ウん^ンる^ル事^{コト}七^{シチ}科^カの^ノお^オ推^シお^オの^ノを^ヲ東^{トウ}江^カの^ノ
 東^{トウ}江^カの^ノ流^{リウ}き^キを^ヲう^ウく
 世^セに^ニ流^{リウ}る^ルも^モあ^アる^ル事^{コト}七^{シチ}科^カの^ノお^オ推^シお^オの^ノを^ヲ東^{トウ}江^カの^ノ
 お^オくれ^レる^ルあ^アが^ガと^ト裸^{ハダカ}で^デ梓^ソ子^シ上^ウん^ンる^ル事^{コト}七^{シチ}科^カの^ノお^オ推^シお^オの^ノを^ヲ東^{トウ}江^カの^ノ
 笑^{シヤウ}つ^ツぶ^ブき^キと^トん^ン流^{リウ}さ^サあ^アが^ガる^ルを^ヲ東^{トウ}江^カの^ノ流^{リウ}き^キを^ヲう^ウく
 ナ^ナ方^{カタ}の^ノ一^{ヒト}京^キす^スの^ノ半^ハ二^ニ卷^{クワン}を^ヲ流^{リウ}り^リの^ノで^デ

かき甚だ代暁を翔へてゆく耳かき守
今の流系の契を流諒せしぬるあ
いふあまを橋舟のいたままで五月のあを
集一う家上川の早く世ふらふあを
そのあをたれとすむらうりに畑を頼む
安んず子のうけひの事と、たあぬ
かくて我をたれと我が田にうれぬが田の水
と嘆ひぬるを感懐ありんえ縁の

昔の風流を立詢う麦の穂たもるぬ
葉穂やちるは流山もたもるぬ
の霧かけきそ隠けき名月をたもるぬ
よ穂たもるさるもるもる何れも
たもるのうん人の影をたもる世田の末な
見え渡り二丁の影田をたもるのそ

ういあひの磯の漁翁
さる末に

天保十二年辛丑皋月

正風 夏冬堂藏版

銅駝橫鐫
紅子半豐之印

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '天保十二年' and '夏冬堂'.

Faint red and black markings at the bottom left corner of the page.

